



## 話題の本棚

ブルース・ホフマン／ジェイコブ・ウェア著『神と銃のアメリカ極右テロリズム』  
矢守克也著『避難学「逃げる」ための人間科学』

## 特集／大学的読書事始め2025

新刊コーナー／私の本棚

〒606-8316

京都市左京区吉田二本松町 吉田南生協会館2階

Tel: 771-6211 / E-mail: ku-teiyo@univ.coop

綴葉HP: [http://www.s-coop.net/about\\_seikyoku/public\\_relations/](http://www.s-coop.net/about_seikyoku/public_relations/)

## アメリカの白人至上主義者によるテロリズムと内戦の可能性

### 神と銃のアメリカ

### 極右テロリズム

ブルース・ホフマン／

ジェイコブ・ウエア著

田口未和訳 みすず書房



学校などで発生した銃撃事件により、多くの人々が犠牲になる事件を耳にしたことはあるだろう。アメリカの学校ではこのような状況に備え、ロックダウンという訓練が行われる。これは、有事の際にすべての教室の鍵を閉め、廊下や窓から人影が見えないようにすることにより、銃による攻撃を防ぐためのものである。この訓練が日常的に行われるアメリカでは、銃がある社会が当たり前になっている。銃の所持が合法的に許容されていることに疑問すら抱かない、そしてこれが自己防衛の一環であると考える人が多いのである。

そんなアメリカにて、二〇二五年一月二十日にドナルド・トランプ氏が第四十七代大統領として再任した。就任以降、「アメリカ第一主義」に基づいて既存の政策転換を実行している。アメリカはどのように変わっていくのか。考えられる結論の一つとして、極右思想を持つ白人至上主義者によるテロリズムが内戦に発展することが挙げられる。

\*\*\*

二〇二二年一月六日、アメリカ合衆国の連邦議会議事堂にトランプ支持者が押し寄せる連邦議会暴襲撃が行われた。その根底には、一八六〇年代の南北戦争以降断続的にみられる過激な極右思想集団

の構築や、一九七〇年代以降頻繁に行われてきた個人もしくは少数集団によるテロリズムの歴史がある。本書は、欧米の民主主義において長期的に脅威になる可能性のある極右思想を持つ白人至上主義者たちによるテロリズムの歴史を詳しく概観・分析することにより、脅威への対策を講じる必要があることを示している。

ここでまず確認しなければならないのは、アメリカ合衆国における「極右思想」は、白人のキリスト教徒男性により営まれる社会の実現を目標にしていることだ。そしてこの思想を持つ人々は、加速主義に基づく過激な運動により、自らの信念を実現しようとする。リベラルや外国人やマイノリティとの共生が謳われる「腐敗」きっている「現代社会を変えるために、既存の秩序の基盤となる民主主義を崩壊させる必要性がある」と考える。その足掛かりとして彼らはエリート層に対して暴力的な攻撃を行い、人々の分断と二極化を促進するのである。

また、アメリカの極右テロリズムの特徴として、「リーダー不在の抵抗」が挙げられる。白人至上主義者による暴力は、大人数の集団で行われるのではなく、銃を武器に、個人によって行われるもの、ということである。つまりは、銃の所持が合法化されていることが、極右テロリズムを成功させている原因となっている。

現在、アメリカが転換期を迎えている。そしてそれは、世界各国に影響を及ぼすのである。アメリカで起こっていることを対岸の火事であると捉えずに、今一度、アメリカの白人至上主義の歴史と、その影響力の大きさについて考える必要がある。

(四二四頁 税込四九五〇円 10月刊)

## これからの避難のために——ラディカルな提言

### 避難学

「逃げる」ための人間科学

矢守克也著

東京大学出版会



災害は自然現象ではなく、人間社会の問題である。どのような規模の地震、津波、豪雨、土砂崩れであれ、そこに生きる人間がいなければ、地球表面で発生した土と水の移動に過ぎない。災害を災害たらしめるのは、それを被る人間なのだ。さらに云えば、気候変動が人間活動を原因とする以上、災害をもたらすそもそも異常気象も人間の所産ということになる。人間と災害はかくも密接に結びつき、自然科学による理解だけではその全貌を議論することはできない。人間科学に基づく研究もまた、そこでは求められているのだ。

#### ◆避難のパラダイムチェンジ

本書は人間科学としての災害研究に対する提言の書である。著者は京都大学防災研究所の教授・矢守克也。テーマとなるのは「避難」だ。これまで場当たりの提案がなされるばかりで、避難は決して十分に論じられていないと著者は云う。問題が喫緊であるために、かえって個別的で表面的な考察に終始しているのではないか。本書において、著者は実際の事例だけでなく、言語学や哲学の知見を踏まえながら、避難についての新たな理論を抜本的に確立しようとする。そうして提案される議論は実にラディカルだ。

たとえば、行政から避難指示が出されたから避難する——そんな、

一方的な情報の授受に基づく意思決定という避難観は、ここでは退けられる。避難の情報と行動が結び付いていない現状がある以上、両者のあいだの関係こそが問題なのだ。むしろ著者は、行政から住民へのトップダウンが成立しない事例に、望ましい避難のあり方を見出す。それは受動と能動を崩す、「中動態」の避難である。

#### ◆災害に対して「フォーワード」であるために

避難は、これから起こる災害に対してなされる。未来は不確実であるので、避難に関するあらゆる意思決定もまた、不確実なものになるほかない（ましてや、災害という緊急時である）。ゆえに、災害が起きてから振り返って「あのときこうすればよかった」と批判することは、いくらでもできてしまう。

必要なのは、だから回顧ではなくフォーワード（展望）の視点である。一寸先は闇の災害において、避難は本来、選択の主体も責任の所在も、曖昧なままに実践されて良い。それが著者の云う、中動態の避難論である。ここでは「自助・共助・公助」のような役割と責任を明確にする言葉や、事前の避難計画さえも、いったん棄却される。理論は根本から再編されなければならないのだ。

そしてフォーワードの視点を持つべき時間は、決して災害の直前だけではない。いま、この瞬間も、いつか発生する災害以前であるはずだ。地球温暖化がもたらす長期的なインパクトを考えるならば、「それ」はすでに始まっているのかもしれない……。本書の補論では、コロナ禍と気候変動を踏まえ、より広範な議論がなされている。現代において、誰もが無関係ではいられない一冊だ。（水炊き）

（二八八頁 税込四二九〇円 10月刊）

〈特集〉

NONO

## 大学的読書事始め

春がやってきました。これから大学に入学する皆さんの目の前には、様々な知の世界が開けています。毎年恒例となっているこの特集では、短い紙幅ながらも編集委員が厳選した一冊一冊の魅力を伝えています。時には背伸びをして、時には肩の力を抜いて、いまのあなたに合った本を探してみてください。

小説、学術書、ノンフィクション、無限に広がる世界をポケットに忍びせて。  
(荒砥)



## 京都の平熱

— 哲学者の都市案内

驚田清一著 講談社学術文庫

京都市営バス「206系統」。吉田キャンパスの横を通過するこのバスのルートを、京都駅から東回りにめぐって話は進んでいく。観光都市ではなく、日常の京都。古いものばかりが注目されがちな京都の新しい部分。読了時には、京都には人生のすべてが詰まっている、という著者の考えが少しだけわかる気がする。京都に住む者として、一読の価値ある一冊。(二八八頁 税込二三三二円)

## すべての、白いものたちの

ハン・ガン著 斎藤真理子訳

河出文庫

二〇二四年、ハン・ガンはアジア人女性として初となるノーベル文学賞受賞を果たした。彼女の文章に触れると、冷たくて、痛い。それも、ただの痛みではない。命の儚さを想起させつつ、もう嫌だというほど、「ここに生きている」ことも実感させる、そんな痛みだ。それでも彼女は書き、私たちは読む。その理由は、この短い物語を読めばきっと、感じ取れるだろう。(二〇〇頁 税込九三二五円)

(フラチ／朝露)

## 空飛ぶ馬

北村薫著

創元推理文庫

文学部一年生の〈私〉が日常のなかで出会う、ささやかな謎。喫茶店で見かけた奇妙な客、夜な夜な現れる赤ずきんの噂、いつの間にか消えてしまった木馬の行方……。人生の大先輩・田繁えんじさんの謎解きを通すと、それらの向こうには思いがけず大きな物語が覗く。日常のなかに埋もれる生きることの悲哀と祝福を、あくまでも優しく見つめる、青春ミステリーの傑作。(三六〇頁 税込七九二円)

## 少女不十分

西尾維新著

講談社文庫

西尾維新の文体の特徴を一つ挙げるなら、それは軽薄なうえ冗長であると同時に、軽快かつ充実した会話劇であろう。しかし本書は、殆ど会話が無い。「十年前、僕は少女に誘拐された」。文章のほとんどは「僕」の独白で占められており、「僕」は西尾維新の小説を書く理由が語られる。普段の西尾維新が纏っている虚飾をそぎ落とし、「誠実さ」が結実した怪物。(三三六頁 税込七二六円)

(水炊き／筏)



## 暗渠マニアック！増補版

吉村生／高山英男著  
ちくま文庫

読むだけで世界の見え方が変わる本がある。世界の仕組みを見透かし、目から入る情報量が飛躍的に上がるような本。それが本書だ。暗渠とは時間的にも空間的にも隠された水路のことであり、中々それと気づきにくい。不自然がゆえに惹きつけられる景観、構造に宿る土地の歴史、暗渠が持つ魅力は美に多層的だ。読後、日常に秘められた光景が浮かび上がってくる。(三三〇頁 税込九九〇円)

## 奴隷のしつけ方

マルクス・シドニウス・アルクス／シエリトナ著  
橘明美訳 ちくま文庫

本書はローマ帝国の誉ある貴族、マルクス・シドニウス・ファルクスの手になる奴隷取扱指南書——という体のフィクションである。現代人には衝撃のタイトルだが、ローマ人にとって奴隷は身近な存在であった。古代世界の奴隷は実際どのように扱われ、暮らしていたのか。当時のローマ人の価値観、文化、社会の在り方が反映された生の声(?)に耳を傾けてみては。(二八八頁 税込九二四円)

(浅／荒砥)

## 野の医者とは笑う

心の治療とは何か？  
東畑閑人著 文春文庫

ぐらぐらと揺らす。権威を、常識を。学問は、自らの足場を揺らしてこそ成長していく。本書は、公的に認められていないスピリチュアルな「野の医者」の治療を研究していくルポエッセイだ。コミカルな文体でありながら、臨床心理学の相対化、心の治療の本質といったハードなテーマが軸となっている。「心と社会」の謎をめぐる医療人類学の旅をお楽しみあれ。(四〇〇頁 税込二〇〇〇円)

## 牙

アフリカゾウの「密猟組織」を追って  
三浦英之著 小学館文庫

アフリカゾウは今も牙を狙う密猟者に顔面を抉り取られている。駐アフリカ記者の三浦は虐殺の「真犯人」を暴くべく、密猟組織の中枢に迫る。生活のため銃を握る地元住民、大量の象牙を買い漁る中国人ビジネスマン、そして印鑑など巨大な象牙市場を維持する国日本。絡み合う現実を解き、日本人の無関心に潜む加害性を告発する。鬼気迫るノンフィクション。(二二四頁 税込八五八円)

(浅／たいやき)

## 絶望を希望に変える経済学

社会の重大問題をどう解決するか  
アブリット・バナジー／エヌテル・デユフロ著  
村井章子訳 日経ヒジネス人文庫

「移民の流入は地域の賃金水準を下げる」「ベーシックインカムは怠惰を助長する」など、真偽不明の情報で蔓延し分断が進む現代。開発経済学者バナジー&デユフロは膨大な研究を引用し、移民や格差といった世界共通の課題を検証する。エビデンスと経済理論に基づいて因果関係を導き、人間が幸福に生きられる政策を提言する「良い経済学」を本書は提示している。(五三三頁 税込二五四〇円)

## はじめての経済思想史

アダム・スミスから現代まで  
中村隆之著 講談社現代新書

分かるようで分からない「経済」なるもの。マイクロ/マクロの細かい数式ではイマイチ本質が掴めた気がしないんだよ……というフラストレーションは、思想に立ち戻って晴らすのが吉。スミス、マルクス、ケインズ、ハイエク、フリードマン。こんなに明快なストーリーで理解できてしまっていないの？と思っただけでほしい。(三三三頁 税込九九〇円)

(たいやき／浅煎り)

### フィールズ賞で見る現代数学

マイケル・モナスティルスキー著

眞野元訳 ちくま学芸文庫

フィールズ賞、それは数学最高峰の栄誉であり、難問の解決や新たな分野を切り拓く理論の創造を成し遂げた若手数学者を讃える賞だ。本書は二〇〇六年までの同賞受賞者の研究を概説している。詳細を全て理解するのは不可能だが、コンパクトにまとめられた現代数学の分野間の繋がりと発展の経緯だけでも一読の価値がある。研究を始める前に読んでおきたかった。(二五六頁 税込二二〇〇円)

### 増補新版 理不尽な進化

遺伝子と運のあいだ

吉川浩満著 ちくま文庫

本書は進化論をテーマにしているが、生物学の入門書でもなければ専門書でもない。むしろその門前で、進化論を説く本だ。生物学において決定的に重要でありながら、数多の誤解を生んできたこの理論は、偶然と死の理不尽を扱う危険なものでもある。ばくははこの本で、科学者としての心構えを教えられた。われわれは決して、恥知らずになつてはいけない、と。(四九六頁 税込二二〇〇円)

(筏／水炊き)

### 時間とはなんだろう

最新物理学で探る「時」の正体

松浦壮著 ブルーバックス

時間は不思議だ。なんで測れないの？いつから存在しているんだろう？ 本場に「流れて」いるの？ 謎は深まるばかり！

本書は物理学の歴史をなぞりつつ時間の正体に迫っていく、なんとも盛りだくさんの一冊だ。もちろん相対性理論も量子論もカバー済み。文系学生でもスラスラ読めて、ワクワクが止まらない。物理学的思考の入門書としても。(二五六頁 税込二二〇〇円)

### 哲学の問い

青山拓央著

ちくま新書

日常の中で、あれ？と思うような瞬間。哲学の営みはそこでこそ生きている。本書に掲載されている問いはどれも生活実感に根ざし、著者が本気で取り組んだものだ。例えば、「マスク生活での恋愛体験は、恋愛というものについて何を示唆してくれただろうか？」。

手堅くだけど、考え尽くすのは容易ではない二四のテーマ。ここから「生きた哲学」入門してみよう。(二二四頁 税込九六八円)

(浅煎り／朝露)

### 意志と表象としての世界

シヨールペンハウアー著

西尾幹二訳 中公クラシックス

シヨールペンハウアーの名前は、「読書について」や「幸福について」の著者として目にしたことがある人が多いだろう。しかし、これらの著書は彼にとってあくまで彼の主著の「余録と補遺」に過ぎない。余録であれば有名なのだから、彼の本気がどれほどのものは想像できるだろう。恐ろしい本！ いきなりこちらから読むのも可。むしろおすすりである。(上巻 四二六頁 税込一九二五円)

### 日本の靈性 完全版

鈴木大拙著

角川ソフィア文庫

鈴木大拙。日本の「禅」を海外に発信した人物として国際的な知名度も高い。「グロバル」が持て囃される昨今、真にそうありたいのなら、まず自らの足元をよく顧みたい。

本書は、先の大戦に傾く時流に軍部の掲げた「日本精神」に抗して大拙が打ち出した思想のエッセンス。講演調で意外なほどに読みやすい、日本人の宗教意識の基層に迫る名著。(四八〇頁 税込二〇五六円)

(コーク／浅煎り)

## 失われた時を求めて 全14巻

マルセル・ブルースト著  
吉川一義訳 岩波文庫

いや、長すぎるよ、と思っただけでしょ。でも違うんです。全十四巻ということは、原理的には(？)もし君が年に十四冊本を読むなら、それを全てこの『失われた時を求めて』に置き換えれば一年で読めるということになるのだから。二〇世紀文学最大の傑作である本書を今読んでおけば、その後一生この權威を後る盾にやっつけていける。読まない理由、ないよね？ (一巻 四六八頁 税込一〇〇〇円)

## 伝奇集

J・L・ボルヘス著  
鼓直訳 岩波文庫

百科事典に紛れ込んだ存在しない国の記述、架空の書物についての架空の書評、無限の書物が収められた無限の図書館——、ようこそ、物語の形をとった迷宮へ。本書は二〇世紀文学の巨匠・ボルヘスの代表作である。収録された小説はどれも短く、けれども果てしない奥行きを持っている。折角だから背伸びをしない、そんな君の知的好奇心を満たしてくれたい、そんな君の知的好奇心を満たしてくれないに違いない。(二八二頁 税込九三三〇円)

(コーク/水炊き)

## ハックルベリー・フィンの冒険(上下)

マーク・トウエイン著  
土屋京子訳 光文社古典新訳文庫

皆さんおなじみ『トム・ソーヤーの冒険』の続編にあたる本書——だが、こちらの方が断然面白い。放浪児のハックはひょんなことから逃亡奴隷のジムと共に逃避行する。しかし舞台は一九世紀のアメリカ南部、黒人奴隷の人権など認められていなかった。逃亡の手助けは重罪。白人ハックは葛藤を重ねる。自由とは、善悪とは？ 波乱万丈、物語の結末やいかに。(四二四頁 税込二二二〇円)

## オイディプス王

ソポクレス著 藤沢令夫訳  
岩波文庫

スフィンクスの謎を解き、テーバイに王として迎え入れられたオイディプス。しかし、都市は災厄に見舞われ、その元凶たる先王殺しの犯人を彼は探し始める……。古代ギリシア悲劇中、最も名を知られた作品。ソポクレスの描いた運命の桎梏と人間たちの生き様は何千年もの間不変の主題であり続けている。認知、逆転、カタルシス——悲劇の条件はここから生まれた。(二六〇頁 税込六二七〇円)

(荒砥/荒砥)

## アメリカカーナ(上下)

チャマダン・ゴズイ・アディーチェ著  
くぼたのぞみ訳 河出文庫

ナイジェリア生まれのイフェメルは、渡米してはじめて「黒人」であることを自覚した人種、ジェンダー、格差といった問題を鋭く提起する本書はしかし、比類なきまでのラブストーリーなのだ。高校生の頃ラゴスで愛を誓ったイフェメルとオビンゼ。大西洋を股にかける二人の半生を氣鋭の作家アディーチェが鮮やかに描く、現代アフリカ文学の話題作。(上巻 四〇八頁 税込一五四〇円)

## 溺れるものと救われるもの

フリーモ・レーヴィ著  
竹山博英訳 朝日文庫

フリーモ・レーヴィ。ナチスの強制収容所から生還したユダヤ系イタリヤ人。アウシュヴィッツの惨状を伝えるために筆を執り続けた彼が死の一年前に刊行したのが本書だ。記憶とは、証言とは、暴力とは、そして善と悪が入り混じった〈灰色の領域〉とは……レーヴィは自身のアウシュヴィッツ体験を交えながら考察を重ねる。その考察の意義は今日でも薄れない。(三二二頁 税込二一〇〇〇円)

(たいやき/ばや)

## 星の旅

藤井旭著

河出文庫

星は、地球上どこからでも見る事ができる。しかし、見える星の種類やその下で営まれている人々の暮らしは大きく異なる。

本書は、モンゴルからアマゾン、モロッコまで……世界各地の星を通じた旅の記録である。現実から少し目を背けたい夜には、空をみあげて、同じ星の下に生きる人々に思いを馳せてみてほしいかもしれない。

(二八八頁 税込二一〇〇円)

## 三四郎

夏目漱石著

角川文庫

一回生のときに読みたかった! と後悔した一冊を、入学前のあなたに紹介したい。何しろ主人公も新入生。熊本から上京してきた三四郎は、軽薄な友人に振り回され、変わり者の教師と仲を深め、謎めいた女性と淡い恋に落ち、少しずつ生活に馴染んでいく。百年前の大学生と肩をならべて、新たな生活、新たなキャンパス、新たな出会いを楽しむのはいかがだろうか。(三三二頁 税込三九八円)

(フランチ/くたかた)

## 今夜、すべてのバーで

中島らも著

講談社文庫

大学に入ると一気に「飲酒」という行為が身近になる。本書は、アルコールを中心に生活していた主人公が入院する場面から幕を開ける。なぜお酒を飲むことを辞められないのか、お酒を辞めるためには何が必要なのか。アルコール依存症の人の心理を描くエッセイ型小説である本書は、酒に吞まれそうになった時に是非思い出してもらいたい一冊である。

(三三八頁 税込八一四円)

## 夏物語

川上未映子著

文春文庫

主人公の夏子は、三八歳の頃「自分の子どもに会いたい」という思いを抱く。性行為ができず、パートナーもいない彼女は、精子提供による出産を目指すようになるのだが……。本書は女性性のあり方を問うだけに留まらず、新たに生命を産み出すことの意味も問う。出産は親のエゴではないのか? そんな問いかけに夏子はどう答えるか。川上未映子の代表作。

(六五六頁 税込二〇八九円)

(フランチ/朝露)

## 中原中也全詩歌集(上下)

中原中也著 吉田照生編

講談社文芸文庫

中原中也の詩はおそらく、誰もが目にすることがあるだろう。でも、オノマトペの珍妙さを取り上げるような微温的な評価はもう止めたい。彼の詩はなによりもまず「うた」なのであり、好きな曲を聴くときのように、ただ共感して感動するときこそ輝く。小賢しい解釈や説教なんかは、この感動が枯渇してしまつた哀れな大人のためのおまけに過ぎない。(上巻 四七〇頁 税込一九八〇円)

## 自選 谷川俊太郎詩集

谷川俊太郎著

岩波文庫

去年、谷川俊太郎が死んだ。てっきりあの人は死なないものと思っていたから不思議な感じがした。本書所収の「生まれたよ ぼく」のなかで「いつかぼくが／＼ここから出て行くときのために／いまからぼくは遺言する」として、彼は最後にこう書き残していた。「そして人はここやってきた日のことを／忘れずにいてほしい。彼はその日のことを忘れずにいただろうか。(四四〇頁 税込九九〇円)

(コーク/ぼや)

## 新刊コーナー

## いのちの車窓から②

星野源著

KADOKAWA

年末の紅白歌合戦。

「地獄でなぜ悪い」

ではなく、「はらば

ら」を弾き語った彼

の、あの沈黙、あの突き刺すような目。

「世界はひとつじゃない」ことを、星野源  
という男はよく知っている。



音楽家であり俳優、そして文筆家でもある  
彼がこれまで綴ってきたエッセイが、七年半  
ぶりに単行本として私たちの手に届く。「く  
せのうた」のPVでギターを爪弾く姿えない  
男は、今や日本を代表するポップスターだ。  
撮影の裏の出来事、発狂しそうな日のこと。  
大切な人との別れ、制作環境の変化、家族と  
の関わり。心のひだにゆっくりと分け入り、  
ただ側にいてくれるような温かさがある。

印象的な話を。二〇二五年の名盤『YEL  
LOW DANCER』には、ブラックミュ  
ージックと日本の音楽文化を架橋するという  
意図が込められている。「SUN」で孤独に

踊る「J」は、マイケル・ジャクソンの姿と  
重なり合う（前作のエッセイで語られるこの  
エピソードは、私のお気に入りだ）。

翻って今作では、「イエロー・ミュージック」  
を掲げたことへの反省が素直に吐露され  
る。「様々な人種が生み出してきた音楽文化  
を一つの地域の音楽であるかの様にジャンル  
化しようとするのは間違っていた」——彼の  
辿ってきた時間がここに浮かび上がる。

ばらばらなこの世界のなかで、私たちは皆  
たった独り。そこで紡がれる彼の言葉は、独  
りを越えていく。POP VIRUSが染し  
い地獄で蔓延中だ。

(二五六頁 税込一五四〇円 9月刊)

## マイナーな感情

アジア系アメリカ人のアイデンティティ

キャシー・パーク・ホン著

池田年穂訳 慶應義塾大学出版会



カマラ・ハリスが  
米大統領選に敗れ、  
アジア系として初の  
米大統領就任はお預  
けとなった。アジア系アメリカ人は近年急増  
し(二〇二二年には二四〇〇万人超)、アジ  
ア系へのヘイトクライムが問題になるなど米  
国内でその存在感を増している。

朝鮮半島出身の両親のもとLAに生まれ育  
った詩人で大学教授のホンは、本書でアジア  
系として生きる苦難や複雑な感情を吐露する。

表題の「マイナーな感情」とは、人種がらみ  
の経験によって惹起される陰鬱な感情だ。普  
段は空気のように無視されるが、経済的成功  
者は「次の白人になる存在」と白人至上主義  
のイデオロギーに吸収される。創作をすれば、  
アジア系の典型的な人種のトラウマの経験を  
反復的に描き白人の聴衆の罪悪感を喚起する  
ことを求められる。黒人やラティンクスに対  
しては、歴史的に優遇されてきた負い目を感じ  
る。こうした葛藤のはさまをホンは綴った。

勤勉な移民の両親に育てられた幼少期から  
詩人として創作を教える現在まで、出会いや  
経験を経横無尽に回想する七編のエッセイは  
どれも重厚だ。第二次大戦下の日系アメリカ  
人による反人種主義活動や朝鮮戦争をめぐり  
抜けた父の記憶など、あまり注目されてこな  
かったアジア系アメリカ人の経験の記録とし  
ても、本書の価値は計り知れない。

白人優位の社会に束縛された状態にむしろ、  
ホンは人種間で連帯する可能性を見出す。非  
白人こそ、世界の多数派である。盟友として  
脆弱なものに寄り添うことで、人間の尊厳を  
取り戻すことができるのだ。

(二四八頁 税込二七五〇円 10月刊)

## はじめての近現代短歌史

高良真実著  
草思社

花鳥風月を尊ぶ雅な世界観の「和歌」から自由な「短歌」へ移行する、明治期の

短歌革新運動。本書はこれを解説する際に、こう書いている。「ただし、自由であるか何が良いものかわからなくなりますが」。図らずもこのシンプルな一文は、短歌にとっつきにくさを感じる現代人の気持ちを代弁しているのではないだろうか。気の赴くまま鑑賞しようとしてみても、「傑作」の良さがさっぱりわからないとつい「自分には向いていない」と思ってしまう。本書はそんな初心者に鑑賞の視座を掴ませる、格好の短歌史入門だ。本書は各時代の秀歌を引きながら、どこが「良いもの」と評価されたのか、そしてそこからどのように次の潮流が生まれたのかをテキストよく解説していく。例えば、先述の短歌革新運動の頃の恋愛歌。和歌の世界では、平安時代の文化に基づき「怨ぶ恋」「待つ恋」のような定型での題詠がされていた。そこに、へやは肌の熱き血汐にふれも見でさびしから

ずや道を説く君 鳳晶子『みたれ髪』

のように、女性が男性をリードするような力強い恋愛歌が登場した。このようにして、新たな「良いもの」——ここでは浪漫主義——の世界が切り拓かれていったのである。

そして短歌史は、誰もが知る俵万智や穂村弘らもいる現代へと続いていく。しかし今なお、「ジエンダー」は大きな問題として残る。著者は、それを明確に認識しつつ、それでも本書の記述は男性中心になってしまった、という。歴史を綴ることの困難と格闘した著者の姿も、本書の魅力の一つである。(朝露) (三三六頁 税込二五三〇円 11月刊)

## 批評の歩き方

赤井浩太／松田樹編  
人文書院

実際、「批評」が何なのかよくわかっていなかった。「創作」ではもちろんないし、かといって「研究」でもないし、「書評」とも違う。そして、何らかの分野についての言説(例えば「文芸批評」や「美術批評」)として限定されるわけでもない、素の

「批評」。否定の繰り返しによって定義され(ているとすら言えない)、けれども何となくイメージできてしまう「批評」。

本書ののっけからその問いにひとまずの答えを与えてみる。批評とは「ハンディな地図」であると言う。このひとまずの答えによって「批評」にもハンディな地図が与えられるわけだ。この仮固定の感じ、多分これだ。この仮固定は「私」の仮固定でもある。批評とは「メタとベタの二重の視点を持つこと」であると宣言する序文にしてからがすでに、単一の「著者」や「編者」に緊密に結びつけられるのではないそのクレバーな身振りをみずからも演じている(のは、実際に手に取って確かめてほしい)。

こうして設定されたフィールドの上で本書が取り上げるのは、想定通りの文芸批評(小林秀雄、柄谷行人)だけでなく、柳田國男(民俗学?)から西田幾多郎(哲学?)をも含んだ多様な時代、ジャンルである。それらを論じかつ紹介する若い書き手たちの経歴とスタイルの多様さは、(批評的な)新時代への希望を謳うミニフェストだ。巻末に二種のブックガイドも付されており、入門書としても参考書としても便利。

さあ、ワイルドサイドを歩こう。(コーク) (二七六頁 税込二七五〇円 11月刊)

## エッシャー完全解説 なぜ不可能が見えるのか

近藤滋著  
みずす書房



エッシャーの人氣は根強い。昨年も展覧会が開かれたかと思えば、現在はそれ

とは別のエッシャー展が開かれているという。その人氣の理由はおそろしく、作品の面白さが良い意味でわかりやすいからだろう。永久機関のように流れ続ける水路、回廊で無限の上昇と下降を続ける修道士たち、額縁の内と外が繋がってしまった画廊……。彼の版画のなかでは、不可能が可能になってしまふ。その驚きは芸術に通曉せずとも一目で実感できるはずだ。けれども、われわれは果たして、彼の仕掛けを十全に理解しているのだろうか？

本書は、錯視を利用したエッシャーの作品のなかでも、とりわけ不可能な建築物を描いたものを中心に、そのトリックを解き明かそうとするエッセイだ。世界的な名声を得てもなお、自分は理解されていないと考えていたというエッシャー。著者はその孤独に分け入るため、新鮮な眼で作品を鑑賞しながら、とくに自ら手を動かし、彼がいかにして不可能

を可能にしているのか、その背景まで含めて考察してゆく。やがて理解されるのは、建築の意匠、人物の姿勢ひとつひとつに凝らされている技巧だ。全体の仕掛けに驚くばかりでは見落としてしまいそうな細部にこそ、遠近法の詐術は宿っていたのである。

表題に反して完全解説には至っていないかったことを思い知らされる一冊だった。本書を片手に、あなたもエッシャーの不可能建築を訪ねてみてはいかがだろうか。(水炊き)

(二〇八頁 税込一九七〇円 12月刊)

## BAUをめぐる冒険

坂口恭平著  
石塚元良写真  
左右社



遠い昔の記憶。幼稚園生の頃だろうか、余っていた段ボールを使って、自分だけの小さな家をたまに作っていた。そのお手製のすみかとはとても簡素で不格好なものなのに、ほかのどんな空間よりも居心地が良かった。今はもう作らなくなりましたが、あの居

心地の良さを、身体は今でも覚えている。

著者によれば、あのすみかこそ「BAU」にほかならない。「BAU」はドイツ語で「家・建築・巣穴・ねぐら」といった意味を持つ言葉。「BAUをめぐる冒険」とはそれゆえ、心のよりどころとなる建築を探す旅のこと。インド、アメリカ、フランス、スペイン……著者は世界各国の建築をめぐる、居心地の良さはどこから生まれるのかを考える。

著者が共感を寄せるのは、機能主義的・合理主義的な近代建築には収まり切らない「余剰」を抱えた建築たち。モダニズムの嵐吹き荒れる二〇世紀の建築が本書には多く登場するが、土地や風土、歴史や伝統から切り離され、自然や生命のうねりを失った近代建築には批判的な眼差しが向けられる。そこで最後に「余剰」を抱えた建築の一例を見ておこう。スペイン北部の工業都市・ビルバオ。この街はかつて金属の輸出で栄えたが、二〇世紀後半に至るとその勢いは見る影もなくなった。しかしそこに現れたのがフランク・O・ゲーリーという建築家。彼はあえて金属を前面に出した建築を作ること、衰退の象徴だったそれを再び息を吹き込んだ。土地や風土、歴史や伝統から生まれた彼の建築は今、ビルバオの人々の大切なBAUとなっている。(ぼや)

(一二三頁 税込二八六〇円 1月刊)

## キネマト文人

「カリガリ博士」で読む日本近代文学

川崎賢子著  
国書刊行会

怪しげな博士。夢遊病の男。連続殺人。歪曲した風景。伝染する狂気——ドイツ

表現主義映画の金字塔と目される「カリガリ博士」の幻影は、遠く日本にも及んでいた。

本書は、文学と映画の深い交渉を巡る文芸評論集である。映画の誕生は日本の文人たちにも少なからぬ衝撃を与えた。曰く、映画は阿片中毒者の白昼夢である。曰く、映画は人間が機械で作りに出すところの夢である。スクリーン上に投影された平面的な影が、観衆のまなざしの参与によって、泣き、笑い、怒り、意味を持つ。対照的に、身しろぎもせず闇に息を潜めてスクリーンを見つめている観衆は、いつのまにか影と化してしまふ。まるでドックペルゲンガーに鏡像を乗っ取られ、主導権を奪われたかのように。

映画の不思議に魅了された文人たちは、その特性を投影した小説を著した。佐藤春夫は、映画でクロスアップされる指紋を根拠に犯人を特定する破綻した探偵小説を。谷崎潤一

郎は、夫よりもファンの方が映画女優の肉体を知り尽くしていると主張する男の話を。芥川龍之介は、嫉妬と疑心にとらわれて妻を殺す自分自身を目撃するという映画の話を。そして三天奇書として知られる夢野久作の「ドグラ・マグラ」は、「カリガリ博士」のモチーフを受け継いでいる。

著者は作品の先行研究のみならず、ベンヤミン、ドゥルーズをはじめ膨大な資料を引きながら、映画とそれを題材にした小説の秘密を浮かび上がらせる。封切から百年。カリガリ博士は何度でも甦る。

(四五六頁 税込四四〇〇円 11月刊)

## カヴァフィス詩集

カヴァフィス著

池澤夏樹訳

岩波文庫



老人が若き日を想う。ある民族が、在りし日の栄華に思いを馳せる。追憶の対

象は消え失せながら、今もここにある。

二十世紀の代表的ギリシヤ語詩人、カヴァフィス。彼が描くアレクサンドリアは、現在エジプトの主要都市であり、古代ギリシヤの

時代にはヘレニズムの中心地であった。詩の舞台は古代と近現代、過去と現在を自由に行き来する。トロイア戦争の英雄アキレウス、敗北したマルクス・アントニウス、アレクサンドリアの片隅の酒場、記憶の中の恋人……。ギリシヤの歴史的過去を言えば、思い起こされるのはその政治的、文化的栄華であろう。しかし、カヴァフィスが描くのは輝かしい過去の情景ではない。時にそれは王権の喪失を暗示するもの（「神がアントニウスのもとを去る」）であったり、権威の失墜を描くもの（「アレクサンドリアからの使者」）であったりする。焦点が当てられるのはさしずめ栄枯盛衰の「枯」「衰」である。こうした視点は個人的感情を描いた作品とも重なり合う。

記憶の中にある若き日の官能と老いた醜い身体は詩人の作品に頻出するモチーフだ。ここでも若き日は単なる憧憬の対象ではない。かすれてしまった記憶はしかし、今なお思い出の一部をなし、輝きを放つ（「はるか昔」）。カヴァフィスの詩を読み解くには、古代ギリシヤに関する知識が欠かせない。だが心配無用、訳者池澤夏樹の詳細な解説と共に、アレクサンドリアの詩的世界へといざなわれ……。「ゼウスは悲しみに沈んでいた……」（「サルペドーンの葬儀」）。

(四七八頁 税込二二三四円 12月刊)

翻訳研究——消え得ぬ差異を見つめて——

入試には大抵、外国語という科目がある。そして和訳問題では原語の「直訳」が求められ、いかに模範解答なるものに近づけるか、ということ将我々は競い、反対に文学作品では「意識」、すなわち読者の読みやすさ、違和感のなるべく少ない透明な訳が求められる——と我々は思い込んでいる。しかしながらこうした二分法的な考えは、我々の翻訳に対する誤謬から成り立っている可能性がある。

『翻訳 訳すことのストラテジー』（白水社）はこうした疑問にかかわる学術的な「翻訳研究」を知るための入門書であり、扱うテーマは多岐にわたる。そもそも「翻訳」とは何であって、どのように定義できるのか？ 翻訳の裏にある政治的、宗教的意図、そして権力とは？ 翻訳がもたらす、そして露わにする言語の不均衡とは？



具体的なトピックを一つ。入試でもおなじみの漢文訓読は古代中国の文章を日本人が読めるように記号を付け、読み下したものだ。それでは、はたしてこれは何語だろうか？ 日本語というには漢文に近すぎるし、かといって古代中国語でもない。著者はこれを言語と言語の中立地帯と呼ぶ。こうした例が示しているように、翻訳という行為の実態は一枚岩ではないことを本書は明らかにしていく。

ある言語をある言語に移し替えるとき、そこでは必ず何かが失われる。意味、音、形式、等々。しかし、翻訳された文章を読む際に我々はそういった差異を無視し、今現在読んでいるものを原テキストそのものだと思ひ込んでしまいがちだ。そうした言語間の差異に

着目し、専門的に扱ったのが『翻訳のスキャンダル 差異の倫理にむけて』（フィルムアート社）である。著者は文化、経済、政治に幅広いかかわる翻訳のスキャンダルについて子細に論じる。

翻訳の「スキャンダル」とは？ 簡潔に言えは、言語間に本来存在するはずの差異を不可視化し、同化（domesticate）



してしまふことである。それは翻訳実践の場でも、そもそもどんな文章を翻訳するのか、といった選択の段階でも現れる。翻訳先の言語の価値観に合わない文章は翻訳されず、必要とされる文章のみが翻訳される。翻訳は多かれ少なかれ、必然的に翻訳する言語の価値観を反映したものとなるのだ。例えば文学作品の翻訳には、かならずある解釈が付きまとい、その解釈は文化的、言語的制約に縁どられていく（そうならざるを得ない）。原テキストを形作る歴史文化のみならず、自言語の歴史文化に対しても意識的であれば、解釈がテキストに内在するものであると信じてしまふ。

では、翻訳は悪であり、原文を読まなければいけない、という原理主義的な考えを受け入れなければならないのか？ 実際問題として、それは不可能である。どんなに語学堪能な研究者であっても、翻訳なしで済ますことはできない（そもそも、原文を読むことが常に正確なテキスト理解をもたらすわけではない）。

それゆえ我々は、言語間に存在する決して消え得ぬ差異から目をそらすことなく、翻訳と向き合い続けねばならないのだ。（荒砥）

## 今なら理解する！フェルマーの最終定理

数論幾何とは、数に関連する性質を図形を用いて研究する数学の分野である。直線や円を方程式で表して交点を求めたりするアレが進化した姿だ。この分野における最もポピュラーな成果といえは、フェルマーの最終定理だろう。今月号の特集で紹介した『フィールズ賞で見る現代数学』では残念ながら取り扱われていないが、アンドリュー・ワイルズはフェルマーの最終定理の証明によって、ただ一人、年齢制限を超えてフィールズ賞特別賞を受賞している。まさに現代数学のマイルストーンと言える結果だ。定理の主張は簡単に理解でき、誰しものがその証明を理解してみたいと思ひ、様々な文献をあつたことがあるだろう。しかし、楕円曲線やらモジュラー形式やら知らない用語が飛び交ひ、なんのこっちゃと挫折したに違ひない。昨年、こうした困難を解消してくれる一冊が現れた。

『数論幾何入門』はフェルマーの最終定理を筆頭に、ラングランズ予想やBSD予想、ウェイユ予想といった数論幾何の大定理を理解することを目的としている。本書は何よりもまず、具体性を重視している。モジュラー曲線や楕円曲線、保型形式といった対象を具体的に計算し、目に見える数式で表現していくため「分かった」という実感を得やすい。また、数学的で抽象的な操作をグラフや図を用いて説明してくれるのもありがたい。



必要な知識は高校数学+ $\alpha$ であり、多項式の方程式や微分が分かれば読み進めることが可能だ。それ以上の微積分や複素解析の知識が必要な場面もあるが、証明の道具として用いる場面が中心なので

最初は読み飛ばし、各定理の繋がりを味わうだけでも問題ないだろう。著者がばっさり飛ばしてよいと明言している箇所もあり、自分の理解度や目的に合わせた読み方が可能だ。もちろん、意欲的な読者であれば本書で深入りしていない部分を自分なりに補ってみることをおすすめする。各章末尾における文献紹介を参考に、他分野の本をつまみ食いしながら進めてみるのも楽しいはずだ。各種論文や教科書をレベル感や特徴と共に紹介しており、この文献紹介だけでも格好のブックガイドとなっている。

本書の素晴らしさはその敷居の低さだけでなく構成の巧みさにもある。後ろの章へのフックがあり次の章の内容が非常に気になる。例えば三章ではモジュラー曲線と格子やトラス（中身が詰まっているドーナツのような図形）、楕円曲線と対応づけることが説明され、実はこれらは複素数という身近なものと対応していることが明かされる。その証明は四章で登場する保形関数を待たねばならない、といった具合だ。中でも六章における具体的な計算が、九章におけるメイザーの定理の具体例となっていた伏線回収には非常に感銘を受け、読んだその日中暇があれば感動を反芻していた。

読了後、二〇ページちょっとでフェルマーの最終定理まで到達していることに驚きを隠せなかった。そのコンパクトさからは想像できないほど充実した内容を、これほどの前提知識の少なさで実現している本は未だかつてなかっただろう。様々なものの対応関係を活かし、ある世界では困難な問題を簡単に解ける世界へ持っていき解決するという数学の醍醐味を手軽に体感できる。観光気分でも構わない。是非一度手に取って欲しい。

## 編集後記

就職のため次号を最後に『綴葉』編集委員を返会する筈です。友人の誘いや偶然の出会いに導かれるまま揺蕩っていた2年間でしたが、幸運にも多くの人に助けていただきどうにか座州せずやってこられました。この場を借りてお礼申し上げます。

私は薄情な性格らしく、これまで経験してきた多くの別れに対して何の感慨も覚えていませんでした（それゆえに叱られたり泣かれたりと周囲の感情を刺激するのは得意だったようですが）。しかし、此度の別れは違うようで、稚拙な表現で敢えて言えば「嫌だなあ」と思ってしまいます。週1回というほどほどのペースで会議をして書評を講評し合い、毎月メ切や選書に悩まされ、読者カードの反応に期待したり、そういった日々を失うことに寂しさを覚えます。書評それ自体は副次的なものですが、やはり人それぞれ扱いたい本、書きたいこと、読ませたいことに個性が現れるもので、書評を通じて人の中身を知った気になれるような独特なコミュニケーションが発生しており、それが好きでした。

さて、そろそろ社会の荒波に向けて漕ぎ出すときが来たようです。私は人知れず難破するかもしれませんが、今後とも『綴葉』をよろしく願いいたします。（筏）

## 当てよう！ 図書カード

3月は別れの季節。「これやこの行くも帰るも別れては知るも知らぬも逢坂の関」と歌われるよう、京と大津を結ぶ関所は古くから人の出会いと別れの場でした。京都に来る人も去る人も、いい出会いがありますように。さて、この歌の作者は誰でしょうか？

1. 蝉丸
2. 紫式部
3. 在原業平
4. 紀貫之

（浅煎り）

《応募方法》 答えを書いた読者カードを、生協のひとことポストに投函してください。下記 QR コードのリンク先 (<https://forms.gle/evEccphotDZiZURY7>) から応募することも可能です。正解者の中から5名の方に図書カードを進呈いたします。応募締め切りは4月15日です。



《11月号の解答》 11月号の問題の正解は、2. のイギリスでした。ペリカン・ブックスを発刊しているのはペンギン・ブックス社で、同名のレーベルの方が有名かもしれません。図書カードの当選者は、びにゃーさん、マリトツォさん、はばさん、天プラそば大盛りさん、いいみょんさんの5名です。当選おめでとうございます。（朝露）

## 読者がらひひひ

○11月号の特集は岩波新書がトップを飾りましたね。こちらの新書ですが、マーク（絵柄）で発行年がわかるんです。そんなところも、岩波新書はおもしろいですね。（いいみょん）

—— お詳しいですね！ 仰る通り、岩波新書の表紙は三度新装され、色やマークが変更されています。現在の「新赤版」にはギリシアの風神が描かれていますが、11月号の特集で取り上げた三冊にはどれもランプのマークが入っていましたね。また『綴葉』の誌面ではわかりづらいですが、表紙の色についても三冊それぞれ異なるものを、紹介していました。歴史が長いレーベルゆえの面白さですね。

○くたくたさんの〈私の本棚〉を拝読し、さっそく『文学の淵を渡る』と牧野信一の著作をいくつか図書館で入手しました。牧野信一は今まで何かのアンソロジーに収録されていた短編を読んだ気がする……？ 程度の接触しか持っていないかったので、楽しみです。

（文学研究科職員・青でんぶ）

—— 大変嬉しいコメントありがとうございます！ あの〈私の本棚〉は編集委員内でも非常に好評でした。今後も皆様の読書生活を豊かにできるよう一同励んで参ります。（朝露）